戦時体制のなかで

昭和一二年に始まった日中戦争は拡大の一途を辿った。昭和一三年には国家総動員法が発動され、戦時体制はいっそう強化された。内外の激しい動きに応じて国民の総力結集が叫ばれ、学校も生徒もこの大きな流れのなかに組み込まれていったのである。

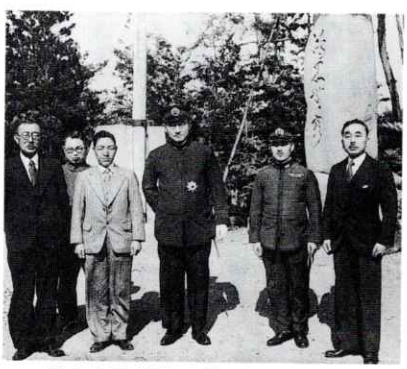
新校舎が落成した昭和一三年には生徒の勤労奉仕が多くなった。六月と一〇月には後藤野飛行場建設作業に駆り出された。スコップの利かない固い地面にツルハシを振るい、大八車やモッコなどで土を運ぶ人海戦術だった。ノルマがあり、他校と競争でやらされるので、「岩中の生徒、よく稼ぐな」などいう係の大人たちの会話を聞いては頑張らざるをえなかった。近くの小学校の講堂の板の間に寝ては蚊に悩ませられ、食事のおかずにはタクアンふた切れというあり様だった。病人が出ないのが不思議なくらいだった。盛岡工専（現岩手大学工学部）の地ならしもやらされた。黒石野の射撃場つくりもやった。種馬所に開墾にも行った。

それでも、この頃まではまだ学校生活に楽しみもあった。雪中行軍、兎狩り、寒稽古、クロスカントリーなどの行事である。雪中行軍ではスキーを履いた生徒もいた。兎狩りには観武ケ原、バラ島、妙泉寺山、浅岸方面へ行き、生徒が勢子となって獲物を追った。その収穫はあまり多くはなかったが、狩りの後で食べる豚汁がおいしかった。寒稽古の最終日の鏡開き、クロスカントリーの後のいものこ汁……。

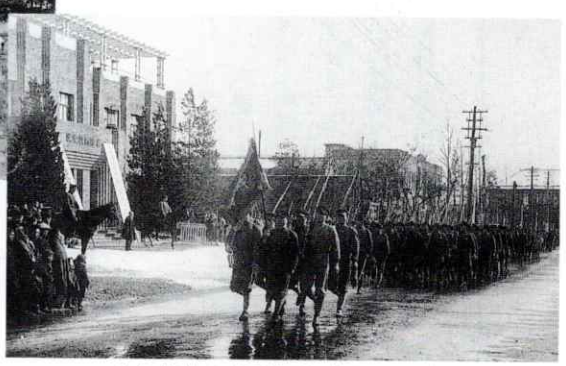
だが、昭和一五年頃から勤労奉仕は練成的意味合いを越えるものとなっていった。昭和一六年二月には「青少年学徒食糧飼料等増産運動実施要綱」が発表され、勤労奉仕は国策協力の実践的教育として位置づけられた。近郊農村の田植え、稲刈り、排水工事などへの出動が多くなった。同じ一六年には石桜会（生徒会）が石桜報国団として再編成され、従来のクラブは鍛練部、国防訓練部などに改められた。まもなく学校組織そのものが、学校長を隊長とする岩手中学報国隊として編成されることになる。

昭和一六年一二月八日、日本はハワイ真珠湾を奇襲し太平洋戦争に突入。このころ、制服は戦闘帽にゲートルがけであり、集団で隊伍を整え登校した。教師に会えば挙手の礼、奉安殿には最敬礼であった。職員室へ入る際は、「何組何某、何々先生に用事があって参りました」と大声で叫んだ。特別警備隊が編成され、防空防火演習なども実施された。戦勝祈願行事への参列も欠かせなかった。校内映画会が月に一、二度あり、戦記物の映画が上映された。生徒のなかにも予科練、少年兵などへの志願者が増え、卒業生の戦死者も数を増した。教師の応召も相

銃後の守り、田植作業（昭和14年）

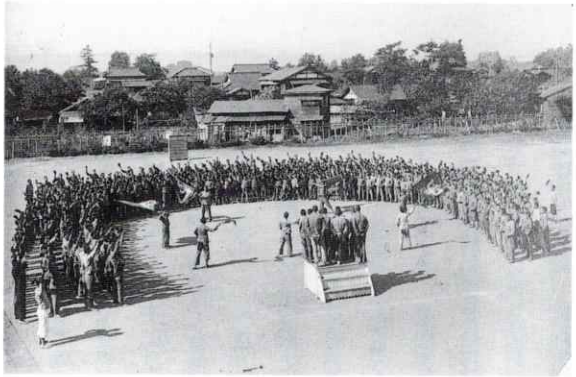


米内光政閣下来校（昭和16年）



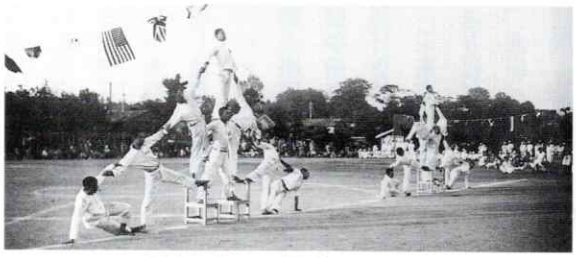
公会堂前の分列行進（昭和11年）

営舎での昼食

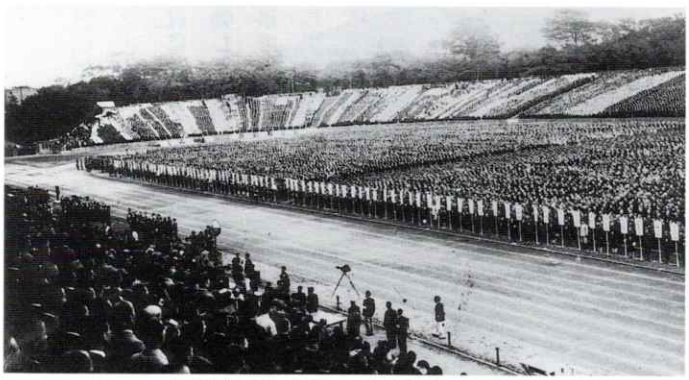


応援歌練習（昭和16～17年）

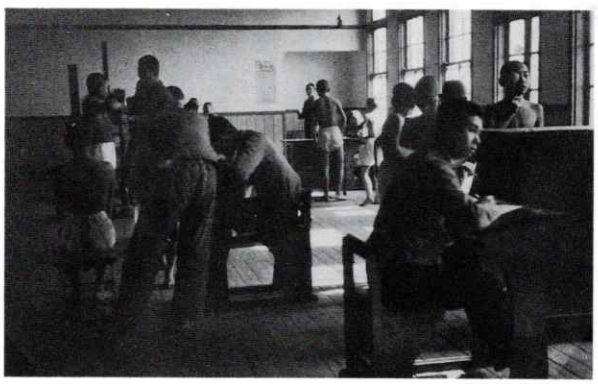
演習終了後　小岩井農場で（昭和16～17年）



岩中名物の…（昭和16～17年）

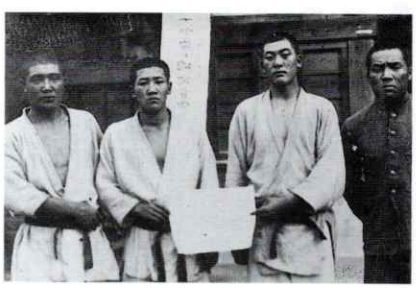


明治神宮大会開会式（昭和17年）



入学試験の体力検査（昭和16年）

戦時色の中、つかの間の自由な写真



明治神宮柔道大会優勝記念
（武徳殿前で昭和16年）

滑空部に憧れて入学した人も

次いだ。

昭和一九年三月には「決戦非常措置要綱ニ基ク学徒動員実施要綱」が閣議決定され、中等学校以上の学徒は原則として通年勤労動員されることになった。その結果、この年から三年生以上の高学年の学業は事実上完全に停止の状態となる。

一九年六月二五日、四年生九二名が久慈鉱山に出動した。鉱脈の表土をはぎ取り、その土をトロッコで運んで捨てるのが仕事だった。七月一七日には五年生六三名が日本鋳造鶴見工場へと出発した。屑鉄を溶かして鋳型に注入するのが仕事である。一〇月には三年生が久慈鉱山へ出動し四年生と代わった。

四年生は三菱重工川崎工場へ出発した。一二月には久慈鉱山の三年生が日本製鋼横浜製作所へ配置換えになった。

下級生の二年生は、六月には庄ケ畑、向中野、山岸方面に出動して田植え作業、九月には不動村に行って稲刈り作業をした。農家に分宿しての援農だった。

こうして学園は戦時色一色となった。職員・生徒・父母いずれにとってもまことにつらい時代だった。